道綽『安楽集』テキストの流伝

辻本俊郎

本小論で取り扱うテキストについては、曇鸞『論註』、道綽『安楽集』（（安）とする）、源信『往生要集』（（往）とする）、法然『選択本願念佛集』（（選）とする）については浄土真宗本願寺派総合研究所教学伝道研究室編『浄土真宗聖典全書（一）三経七祖篇』本願寺出版[1]を使用し、源隆国『安養集』（（養）とする）については、西村冏紹監修・梯信暁編〔一九九三〕『宇治大納言源隆国編安養集　本文と研究』百華苑、親鸞『教行信証』（（教）とする）については教学伝道センター編〔二〇一一〕『浄土真宗全書㈡宗祖篇上』本願寺出版社を使用し、良忠『安楽集私記』（（私）とする）は、『浄土宗全書』を、その他のテキストについては、大正新脩大蔵経を使用した。

なお、本小論は、それらの校勘記、諸本も対照の上、論をすすめていく。

〇、はじめに

道綽（西暦五六二～六四五年）『安楽集』は、部分的には敦煌写本として残ってはいるが、中国大陸においていつしか失われ、そのテキストは完本としては日本に写本、版本として伝わっている。そうしたこともあって、『安

楽集』テキストそのものは、十分に研究されてきたとは言い難い。本小論では『安楽集』本文と諸師の著作に引用されてきた『安楽集』本文とを比較することによって、中国・日本における『安楽集』テキストの流伝状況を明確にするとともに、『安楽集』テキストの、より古い形態を探りたい。

一、延寿と『安楽集』

延寿（西暦九〇四～九七六年）『宗鏡録』には『論註』本文が引用されている。すなわち、

天親云。廣略相入者。諸佛有二種身。一法性法身。二方便法身。由法性法身故生方便法身。由方便法身**故顕出**法性法身。此二種身。異而不可分。一而不可同。是故廣略相入。（大正四八巻五三五中）。

である。『宗鏡録』は「天親云」としながらも、その内容は『無量寿経論』ではなく、曇鸞『論註』の文を引用しているのである。

実は、この『論註』の文は道綽も『安楽集』の中で引用しているのである。今これを『安楽集』、『論註』に対応する文と対照させてみよう。

『安楽集』

天親菩薩論云。若能觀二十九種莊嚴清淨即略入一法句。一法句者謂清淨句。清淨句者即是智惠无爲法身故。何故須廣略相入者。但諸佛菩薩有二種法身。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身故生方便法身。由方便法身**故顕出**法性法身。此二種法身。異而不可分一而不可同。是故廣略相入。（五八五頁）

『論註』

上國土莊嚴十七句如來莊嚴八句菩薩莊嚴四句爲廣。入一法句爲略。何故示現廣略相入諸佛菩薩有二種法身。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身生方便法身。由方便法身出法性法身。此二法身。異而不可分。一而不可同。是故廣略相入。（五一六頁）

これらを見ると、三者は比較的よく合致するようであるが、『宗鏡録』に引用された文は『論註』よりも『安楽集』の文と比較的よく合うようである。さらに、仔細に見ていくと、『宗鏡録』には「故顕出」という文句が見られ、『安楽集』においても同様に「故顕出」という文句が確認される。このことについては、すでに中国仏教研究会〔一九九九〕注一二一で「『安楽集』から引用されたとも考えられる」と指摘されているが、このようにそれぞれを対照させてみると、「『安楽集』から引用されたとも考えられる」というより、「故顕出」の文言が『論註』にないことから『安楽集』からの引用と考えるのが自然ではないか。つまり、ここでは延寿は『論註』ではなく、『安楽集』を見て、「天親云」として『論註』の文を引いていたということが確認できよう。(2)

さらに、延寿『宗鏡録』には次のような文も見られる。すなわち、

安楽集云。問。何因一念佛之力。能斷一切諸障。答。**如經云**。譬如有人用師子筋以爲琴絃、音聲一奏、一切餘絃悉皆斷壞。若人菩提心中行念佛三昧者、一切煩惱一切諸障悉皆斷滅、亦如有人構取牛羊驢馬一切諸乳置一器中、若將師子乳一滴投之、直過無難、一切諸乳悉皆破壞、變為清水、若人但能菩提心中行念仏三昧者、一切悪魔諸障直過無難。（大正四八巻九五一下）

『安楽集』の対応文は次の通りである。

何因一念之力能斷一切諸障。（中略）何者**如花嚴經云**。譬如有人用師子筋以爲琴絃、音聲一奏、一切餘絃悉皆斷壞。若人菩提心中行念佛三昧者、一切煩惱一切諸障悉皆斷滅、亦如有人構取牛羊驢馬一切諸乳置一器中、若持師子

乳一滴投之、直過无難、一切諸乳悉皆破壞、變爲清水。若人但能菩提心中行念佛三昧者、一切惡魔諸障直過无難。（五七九頁）

この文章は、『論註』にはない。つまり、ここでも延寿は、『宗鏡録』を著す際に、『安楽集』を見ていたことが明らかである。

これまでは牧田諦亮・直海玄哲・宮井里佳〔一九九五〕が、法照（西暦八世紀頃）『浄土五会念仏略法事儀讃』、飛錫（西暦八世紀頃）『念仏三昧宝王論』、慧琳（西暦七三七～八二〇年）『一切経音義』（西暦八〇七年）に『安楽集』が引用されているから、『安楽集』は唐代まで確認できるが、宋代になると存在していたかどうか不明であるとし、また、杉山裕俊〔二〇一四〕は、『安楽集』の文は、慧琳『一切経音義』に引用されているから、唐代末までは『安楽集』は存在していたとする。しかし、ここで中国における『安楽集』は、唐代に散逸していたのではなく、五代・十国時代（西暦九〇七～九六〇年）、宋代（西暦九六〇～一二七九年）最初期に確認できたのである。

さらに言えば、実は宗曉（西暦一一五一～一二一四年）の『楽邦遺稿』にもこれと同じような文が引用されている、すなわち、

問曰。何因縁故。一念佛力。能斷一切諸障。答。**如經云**。譬如有人用師子筋爲琴弦、一奏、一切餘弦悉斷。若人於菩提心中行念佛三昧、一切諸煩惱障皆悉斷滅、亦如有人取牛羊驢馬諸乳置一器中、若將師子乳一滴投之、一切諸乳悉化爲水、若人於菩提心行念佛三昧、一切惡魔諸障直過無難。（大正四七巻二三四中）

もし、宗曉がこれらの文を直接『安楽集』から引用していたとしたならば、『安楽集』は、宗曉の活躍した年代、すなわち、西暦十三世紀初めまで中国においてその存在が確認されることになろう。しかし、確定的なことは言えないが、『宗鏡録』、『楽邦遺稿』は「如経云」と引用しているのに対して、『安楽集』は「如華厳経云」と引用して

いることから宗暁は、『安楽集』ではなく、『宗鏡録』を参照して、この文章を引用したと考えられよう。いずれにせよ、『安楽集』は、延寿の引用により西暦十世紀までは中国に存していたことが明らかとなり、従来の学説を修正できたと考える。

二、『無量寿観経纘述』に見られる『安楽集』

龍谷大学図書館所蔵の敦煌古逸観経疏に、『無量寿観経纘述』の断片がある。すなわち『無量寿観経纘述』（甲本）、（乙本）である。この他に『敦煌宝蔵』五七巻、『大正』八五巻『無量寿観経義記』と称するテキストが、『無量寿観経纘述』の断片である。これらの中で『安楽集』本文が確認できるのは、（甲本）、（乙本）の二本である。ここでは、『無量寿観経纘述』と『安楽集』本文（高野山宝寿院所蔵鎌倉時代本）とを比較して、『無量寿観経纘述』の著者が参照した『安楽集』テキストを探りたい。

①（安）「皆云阿彌陀佛是化身、**土亦是化土**此爲大**失也**」（五八〇頁）となっているが、（甲）「皆云阿彌陀佛是化身、此爲大**夫**」となっており、『無量寿観経纘述』甲本には著者の意図、あるいは筆写者の意識的、無意識的かどうかは明らかではないが、「土亦是化土」という語句が欠けている。また、「失也」と「夫」の異同であるが、『無量寿観経纘述』甲本を支持するテキストは見当たらない。

②（安）「龍**主**如來」（五八〇頁）、（甲）「龍**王**如來」。「龍王」となっている『安楽集』テキストは、龍谷大学所蔵宝永元年本（崎陽本）である。大谷大学所蔵順芸本、『七祖聖教』所収本、龍谷大学所蔵正平二年本は、「龍**主王**如

來」となっており、『無量寿観経纘述』甲本を支持する『安楽集』テキストは見当たらない。(3)

③（安）「由**如**今日踊歩如來」（五八〇頁）、（甲）「**猶若**今日踊歩**健**如來」。「猶若」を支持しているのは、高野山宝寿院所蔵天永三年本、「健」を支持しているのは、高野山宝寿院所蔵天永三年本、龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山本）、『七祖聖教』所収本である。大谷大学所蔵順芸本は、「由**如**今日踊**戒属**如來」となっている。(4)

④（安）「穢濁世中**如**現成佛者」（五八〇頁）、（甲）「穢濁世中現成佛者」。『無量寿観経纘述』甲本を支持しているテキストは、高野山宝寿院所蔵天永三年本、『七祖聖教』所収本、大谷大学所蔵順芸本である。(5)

⑤（安）「一切正法一切像法一切**末**法」（五八〇頁）、（甲）「一切正法一切像法一切**滅**法」。『無量寿観経纘述』甲本を支持しているのは、高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本である。(6)

以上が『無量寿観経纘述』甲本との異同である。

⑥（安）「**但非**我出此土」（五八一頁）、（乙）「**非但**我出此土」。「非但」となっているのは、高野山宝寿院所蔵天永三年本、龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山本）、大谷大学所蔵順芸本である。

⑦（安）「阿彌陀佛有父母」（五八一頁）、（乙）「阿彌陀佛有父母**耶既有父母**」。『無量寿観纘述』乙本を支持するテキストは見当たらないが、強いて言えば、高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本が「阿彌陀佛有父母**若有父母**」となっている。(7)

以上のことから、『無量寿観経纘述』に見られる『安楽集』本文は、用例の少ないこともあって確定的なことは言えないが、七例の中で③④⑤⑥の文から判断して比較的高野山宝寿院所蔵天永三年本、もしくは大谷大学所蔵順芸本の特徴が強いと言えるのではないか。(8)

三、『敦煌宝蔵』第一一〇巻所収『安楽集』断片

『敦煌宝蔵』第一一〇巻に『安楽集』断片であるが、その写真版が公開されている。このテキストについても、現存する『安楽集』テキストと対照してみよう。

①（安）「要須発菩提心為**源**」（五八七頁）、（敦）「要須発菩提心為**原**」。「原」となっているのは、高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本である。

②（安）「**云何**菩提者乃是无上佛道之名**也**」（五八七頁）、（敦）「**言**菩提者乃是无上佛道之名」。『敦煌宝蔵』第一一〇巻所収『安楽集』断片を支持するテキストはない。

③（安）「三者化身菩提**也**」（五八七頁）、（敦）「三者化身菩提」。敦煌宝蔵を支持しているのは大谷大学所蔵順芸本である。

④（安）「**理出天眞**不假脩成名為法身**佛道體本名曰**菩提」（五八七頁）、（敦）「不假脩成名為法身菩提」。筆者が確認した『安楽集』テキスト類の中で敦煌宝蔵を支持しているのはなかった。

⑤（安）「**言**化身菩提者」（五八七頁）、（敦）「**三**化身菩提者」。高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本が『敦煌宝蔵』第一一〇巻所収『安楽集』断片を支持している。(9)

⑥（安）「謂從**報**起用能**趣**万機名為化身」（五八七頁）、（敦）「謂從**真**起用能**赴**万機名為化身」。「真」を支持しているテキストは確認できなかったが、「赴」を支持しているのは、大谷大学所蔵順芸本高野山宝寿院所蔵天永三年本である。

以上、わずかな用例で、しかも②④についてはどのテキストの系統であるのか、判明しなかったので、確実なことは言えないが、①③⑤⑥から判断して『敦煌宝蔵』に収められている『安楽集』断片は高野山宝寿院所蔵天永三年本、あるいは大谷大学所蔵順芸本の傾向がやや強いのではないか。何より重要なことはこれらのテキストにおける字句の異同が、唐代において確認できるということである。ということは、これらが他のテキストに比してより古い情報を我々に提供しているのではないか。

四、日本諸師の引用された『安楽集』

この章では、日本の諸師に引用された道綽『安楽集』を精査することによって、流伝や系統などを意識しながら、彼らが『安楽集』テキストのどの系統のものを参照したかについて検討したい。

『安楽集』は古くは奈良時代の天平十四年（西暦七四二年）に初めて書写されて、奈良時代末までは、十二回も書写されたようである。日本における最初の『安楽集』に引用は源信（西暦九四二～一〇一七年）『往生要集』（西暦九八五年）である。この『往生要集』には多数の『安楽集』本文の引用文が見られる。以下、『安楽集』本文と『往生要集』の引用文とを比較してみよう。

①（安）「是報土」（五七九頁）、（往）「是**報佛**報土」（一二〇二頁）。『安楽集』高野山宝寿院所蔵天永三年本が「是報佛土」となっているが、その他のテキストは「是報土」となっており、『往生要集』の引用文を支持しているものはない。

②（安）「由如今日踊歩如来魔恐怖如来」（五八〇頁）、（往）「由如今日踊歩**健**如来魔恐怖如来」（一二〇二頁）。龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山版）、『七祖聖教』所収本が「踊歩**健**如来」、それに対して大谷大学所蔵順芸本では「踊**戒属**如来」となっている。つまり、ここでは龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山版）、『七祖聖教』所収本『安楽集』と、『往生要集』の引用文とが一致するのである。

③（安）「此是報身、**示**現隠没相」（五八〇頁）、（往）「此是報身、現隠没相」（一二〇二頁）「示」の出入のみである。ここでの『安楽集』テキスト間での字句の異同は見られない。

④（安）「此心**究竟等若虚空。此心**長遠盡未来際」（五八七頁）、（往）「此心長遠盡未来際」（一〇七六頁）。親鸞もこの文を『教行信証』の中で引用しているが、『往生要集』と一致しているのである。源信、親鸞の二人とも同じ『安楽集』テキストを見た可能性も考えられるのである。

⑤（安）「傾無始生死有**淪**」（五八七頁）、（往）「傾無始生死有**淪**」（一〇七六頁）。ここでは、両者とも一致しているが、『安楽集』テキストでは高野山宝寿院所蔵天永三年本が「淪」ではなく「輪」となっている。同様に『往生要集』テキストでも「輪」となっているものも存する。すなわち、龍谷大学所蔵建長五年本と龍谷大学所蔵室町時代本である。

⑥（安）「**汝**以三界繋業為重、疑彼少時念**佛**為軽」（六〇〇頁）、（往）「**豈**以三界繋業為重、疑彼少時念**法**為軽」（一二二二頁）。ここでは両者ともそれぞれテキスト間の字句の異同は確認できなかった。

⑦（安）「斯須之**項**富貴盈望」（六〇〇頁）、（往）「斯須之**項**富貴盈望」（一二二二頁）。龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山本）、『七祖聖教』所収本が、「斯須之**頃**富貴盈望」となっている。

以上、源信が『往生要集』を著す際に、実際に参照していた『安楽集』テキストについて見てきたが、ある場合

は高野山宝寿院鎌倉時代刊本、龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山版）を支持しているので、残念ながら確定することはできなかった。

藤原頼通（西暦九九二年〜一〇七四年）の側近であった源隆国（西暦一〇〇四年〜一〇七七年）『安養集』（西暦一〇七一年）にも『安楽集』本文が数多く散見される。

①（安）「第一大門中明教興所由」（五七四頁）、（養）「第一大門中**有**明教興所由」（四九五頁）。これを支持しているのは、大谷大学所蔵順芸本である。

②（安）「**常**當観察時方便」（五七四頁）、（養）「**常**當観察時方便」（四九五頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「**當**當観察時方便」となっており、それ以外は高野山宝寿院鎌倉時代刊本をはじめすべて「**常**當観察時方便」である。

③（安）「若折乾薪以見**火火**不可得无智故」（五七四頁）、（養）「若折乾薪以見**火火**不可得无智故」（四九五頁）。龍谷大学所蔵正平二年本、『七祖聖教』所収本、龍谷大学所蔵寛政八年本が「若折乾薪以見**水水**不可得无智故」となっている。[10]

④（安）「我諸弟子学慧得**堅固**」（五七四頁）、（養）「我諸弟子学慧得**堅固**」（四九五頁）。高野山宝寿院所蔵鎌倉時代本、龍谷大学所蔵正平二年本が「我諸弟子学慧得**固堅**」となっており、「堅固」が「固堅」となっている。それ以外は高野山宝寿院鎌倉時代刊本をはじめすべて「我諸弟子学慧得**堅固**」である。

⑤（安）「学多聞**読**誦得堅固」（五七四頁）、（養）「学多聞**読**誦得堅固」（四九五頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「学多聞**讃**誦得堅固」となっているのである。それ以外は高野山宝寿院鎌倉時代刊本をはじめすべて「学多聞**読**

誦得堅固」である。

⑥（安）「**又**若去聖近**即前**者修定修慧是**其**正学」（五七五頁）、（養）「**又来**若去聖近**時若**者修定修慧是**甚**正学（四九五頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「**又近来**若去聖近**即**者修定修慧是正学」、大谷大学所蔵順芸本では「**又来**去聖近**時**者修定修慧是**其**正学」となっており、すべて一致しないが、（養）と近い関係にあると言える。

⑦（安）「然大聖**弘**慈**勧**歸極楽」（五七五頁）、（養）「然大聖**弘**慈**歎**歸極楽」（四九五頁）。（養）を支持しているのは、大谷大学所蔵順芸本である。龍谷大学所蔵正平二年本、『七祖聖教』所収本、龍谷大学元禄十一年本（義山版）では「然大聖**加**慈**勧**歸極楽」となっている。

⑧（安）「若欲**抜尋**衆典勧處彌多」（五七五頁）、（養）「若欲**披尋**衆典勧處彌多」（四九五頁）。ここでは高野山宝寿院所蔵天永三年本が「若欲**抜求**衆典勧處彌多」となっている。

⑨（安）「一**者**口説十二部経」（五七八頁）、（養）「一**者**口説十二部経」（一〇五頁）。龍谷大学所蔵正平二年本が、「一**者世**口説十二部経」である。それ以外は高野山宝寿院鎌倉時代刊本をはじめすべて「一**者**口説十二部経」である。

⑩（安）「无**問**佛身現在過去」（五七八頁）、（養）「无**問**佛身現在過去」（一〇五頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「无**間**佛身現在過去」となっている。それ以外は高野山宝寿院鎌倉時代刊本をはじめすべて「无**問**佛身現在過去」である。

⑪（安）「雖有根**牙**猶未**出**土」（五七八頁）、（養）「雖有根**牙**猶未**出**土」（一〇五頁）。『七祖聖教』所収本「雖有根**芽**猶未**出**土」、高野山宝寿院所蔵天永三年本「雖有根**牙**猶未**生**土」となっている。それ以外は高野山宝寿院鎌倉時代刊本をはじめすべて「雖有根**牙**猶未**出**土」である。

⑫（安）「問**曰計**一**切**衆生念佛之功亦應**一切**可知」（五七九頁）、（養）「問**曰許**一**切**衆生念佛之功亦應可知」（一〇六頁）。ここでは、高野山宝寿院所蔵天永三年本が「問**計**一衆生念佛之功亦應**一切**可知」となっている。

⑬（安）「若**持**師子乳一滴投之」（五七九頁）、（養）「若**將**師子乳一滴投之」（一〇六頁）。（養）「若**將**師子乳一滴」を支持しているのは、大谷大学所蔵順芸本である。

⑭（安）「土亦是化**土**」（五八〇頁）、（養）「土亦是化」（二八〇頁）。ここで（養）を支持しているのは、大谷大学所蔵順芸本、及び高野山宝寿院所蔵天永三年本である。

⑮（安）「由如今日**踊歩**如来魔恐怖如来」（五八〇頁）、（養）「由如今日**誦歩**如来魔恐怖如来」（二八〇頁）。『七祖聖教』所収本が「由如今日**踊歩健**如来魔恐怖如来」、大谷大学所蔵順芸本は、「由如今日**踊戒屬**如来魔恐怖如来」となっている。

⑯（安）「穢濁世中**如**現成佛者當成佛者」（五八〇頁）、（養）「穢濁世中現成佛者當成佛者」（二八〇頁）。ここで（養）を支持しているのは、大谷大学所蔵順芸本、及び高野山宝寿院所蔵天永三年本である。

⑰（安）「乃至住**持**一切正法一切像法一切**末**法」（五八〇頁）、（養）「乃至住**數**一切正法一切像法一切**滅**法」（二八〇頁）。高野山宝寿院所蔵鎌倉時代本「乃至住**持**一切正法一切像法一切**末**法」となっているが、高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本では「乃至住**持**一切正法一切像法一切**滅**法」となっている。

⑱（安）「觀**世**音菩薩次補佛處」（五八〇頁）、（養）「觀音菩薩次補佛處」（二八一頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本の二本が、（養）を支持している。

⑲（安）「就**初發**菩提心内有四番一**出菩提心功用**」（五八六頁）、（養）「就菩提心内有四番一**出菩提心功用**」（七三頁）。（養）を支持しているのは、大谷大学所蔵順芸本である。

⑳（安）「答曰菩提正體理**求無**相」（五八八頁）、（養）「答曰菩提正體理**無求**相」（七三頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本が、（養）を支持している。

㉑（安）「少分似同**據**體大別**有**其四種」（五九五頁）、（養）「少分似同**據**體大別**有**其四種」（二二頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は、「少分似同**處**體大別其四種」である。それ以外は高野山宝寿院鎌倉時代刊本をはじめすべて「少分似同**據**體大別**有**其四種」である。

㉒（安）「第八**挍**量願生十方浄土」（五九六頁）、（養）「第八**教**願生十方浄土」（三一頁）。ここでも（養）を支持しているのは、高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本の二本である。

㉓（安）「若能依願**修行**莫不獲益」（五九七頁）、（養）「若能依願莫不獲益」（三一頁）。大谷大学所蔵順芸本は、ここでは（養）ではなく、（安）と一致している。ただ高野山宝寿院所蔵天永三年本が、「若能依願**往**莫不獲益」となっているのである。

㉔（安）「不思議智**力者**能**以**少作多」（五九九頁）、（養）「不思議智**者力**能**曰**少作多」（九七頁）。（養）を支持するテキストは見当たらない。高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本は「不思議智**者力**能**以**少作多」となっている。

㉕（安）「業道如**秤**重處先牽」（六〇〇頁）、（養）「業道如**稱**重處先牽」（九八頁）。（養）を支持しているのは、高野山宝寿院所蔵天永本、大谷大学所蔵順芸本の二本である。

㉖（安）「自依止有**後**心有間心生今此十念者依止無**後**心無間心起」（六〇一頁）、（養）「自依止有**有**心有間心生今此十念者依止無**有**心無間心起」（八六頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本の二本は、「自依止**無有**心有間心生今此十念者依止無**有**心無間心起」となっている。

以上見てきたように用例を二六文を採り上げたが、⑥⑮⑰㉓㉔㉖以外は、すなわち、二六文中二〇文が実に大谷大学所蔵順芸本を支持しているのである。また、②③④⑤⑨⑩⑪㉑の八文が高野山宝寿院所蔵鎌倉時代刊本を支持している。確定的なことは言えないが、源隆国が『安養集』を編集する際に、参考とした『安楽集』テキストは、大谷大学図書館所蔵順芸本（高山寺旧蔵本敷写本）傾向が強いテキストであることが明らかである。

次に永観（西暦一〇三三～一一一一年）の『往生拾因』（西暦一一〇三年）（拾）とする）を見てみよう。

①（安）「如禁呪**辭**曰」（六〇六頁）、（拾）「如禁呪**辭**曰」（大正八四巻九四下）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「如禁呪**解**曰」となっている。

②（安）「或復有人患脚轉**筋**」（六〇六頁）、（拾）「或復有人患脚轉**筋**」（大正八四巻九四下）高野山宝寿院所蔵天永三年本が「或復有人患脚轉**薛**」となっており、どういうわけか「筋」の文字が「薛」となっているのである。

③（安）「十方佛國皆悉嚴淨。**隨**願並得往生」（六三一頁）、（拾）「十方佛國皆悉嚴淨。**隨**願並得往生」（大正八四巻九五上）。ここでは、高野山宝寿院所蔵天永三年本、及び大谷大学所蔵順芸本の二本が、「十方佛國皆悉嚴淨。**經云隨**願並得往生」となっている。

④（安）「須彌四**域**經云」（六三二頁）、（拾）「須彌四**域**經云」（大正八四巻九五中）。ここでも、高野山宝寿院所蔵天永三年本、及び大谷大学所蔵順芸本の二本が、異なっているのである。すなわち、「須彌四**城**經云」となっており、「域」が「城」となっているのである。

⑤（安）「**縱**有天人来下但用**項**光照用」（六三二頁）、（拾）「**縱**有天人来下但用**頂**光照用」（大正八四巻九五中）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「**縱**有天人来下但用**須**光照用」、大谷大学所蔵順芸本では「**從**有天人来下但用**項**光照

用」となっている。

⑥（安）「即伏**羲**女媧是」（六三二頁）、（拾）「即伏**羲**女媧是」（大正八四巻九五中）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「即伏**義**女媧是」、大谷大学所蔵順芸本は「即伏**犠**女媧是」となっている。

⑦（安）「其土衆生**唯**食菓子」（五九七頁）、（拾）「其土衆生**草子為**食」（大正八四巻九六中）。高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本では「其土衆生**唯食草子**」となっている。

⑧（安）「逢**者**相**噉**」（五九七頁）、（拾）「逢**者**相**噉**」（大正八四巻九六中）。高野山宝寿院所蔵天永三年本では「逢**者**相**敢**」、大谷大学所蔵順芸本では「逢**著**相**噉**」となっている。

以上、八例を見てきたが、永観が参照した『安楽集』テキストは、②③④⑤⑥⑦⑧が示している通り、高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本では決してあり得ないことは明白である。（安）の底本や校勘記において異読がなかったことから高野山宝寿院所蔵鎌倉時代刊本、あるいは龍谷大学所蔵正平二年本、『七祖聖教』所収本、龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山版）のいずれかの系統であろう。

珍海（西暦一〇九一～一一五二年）『決定往生集』（西暦一一四二年）（（決）とする）。

①（安）「**如**有人對敵破陣」（六〇二頁）、（決）「**又**有人對敵破陣」（大正八四巻一一二下）。ここで（決）を支持しているのは高野山宝寿院所蔵天永三年本である。

一例のみであるので、確定的な結論を出すことは非常に危険ではあるが、ともかくここでは高野山宝寿院所蔵天永三年本を支持しているのである。

編者不明『安養抄』（白河院政期）（（抄）とする）。源隆国『安養集』と同様、浄土教に関する参考資料集的な書である。

①（安）「現在彌陀是報佛極楽寶莊嚴國是**報土**」（五七九頁）、（抄）「現在**阿**彌陀是報佛極楽寶莊嚴國是**報淨土**」（大正八四巻一二七上）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「現在彌陀是報佛極楽寶莊嚴國是**報佛土**」となっている。

②（安）「土亦是化**土**」（五八〇頁）、（抄）「土亦是化」（大正八四巻一二七上）。ここでは（抄）を支持しているのは高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本である。

③（安）「觀**世**音菩薩次補佛處」（五八〇頁）、（抄）「觀音菩薩次補佛處」（大正八四巻一二七中）。ここで（抄）を支持しているのは高野山宝寿院所蔵天永三年本であり、大谷大学所蔵順芸本は、「觀音次補佛處」となっている。

④（安）「**但非**我出此土一切如來亦復如是」（五八一頁）、（抄）「**非但**我出此土一切如來亦復如是」（大正八四巻一二七中）。（抄）を支持しているのは、高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本、龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山版）である。

⑤（安）「要須發菩提心爲**源**」（五八七頁）、（抄）「要須發菩提心爲**源**」（大正八四巻一二七中）。高野山宝寿院所蔵天永本、大谷大学所蔵順芸本は「要須發菩提心爲**原**」となっている。

⑥（安）「恒擬運度爲**懐**」（五八七頁）、（抄）「恒擬運度爲**情懐**」（大正八四巻一三九下）。（抄）を支持しているのは高野山宝寿院所蔵天永三年本である。

⑦（安）「第九據**攝**論與此經相違」（五九七頁）、（抄）「第九據**攝**論與此經相違」（大正八四巻一五八上）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「第九據論與此經相違」となっており、「攝」の字が脱落している。

⑧（安）「依攝論云**遣**佛別時意語」（五九八頁）、（抄）「依攝論云**遣**佛別時意語」（大正八四巻一五八上）。ここでも

高野山宝寿院所蔵天永三年本が異なっている。すなわち、「依攝論云佛別時意語」となっており、「導」の字が脱落している。

⑨（安）「但得作因、**未即得**生」（五九八頁）、（抄）得作因、**未即得**生」（大正八四巻一五八上）。またここでも高野山宝寿院所蔵天永三年本が異なっている。すなわち、「但得作因、**未得即**生」となっている。

⑩（安）「皆**明**先因後果理数**炳**然」（五九八頁）、（抄）「皆**明**先因後果理数**炳**然」（大正八四巻一五八上）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「皆先因後果理数**恆**然」である。大谷大学所蔵順芸本は「皆**明**先因後果理数**恆**然」となっている。

⑪（安）「若經供養一恒**河**沙諸佛」（五九八頁）、（抄）「若經供養一恒**河**沙諸佛」（大正八四巻一五八上）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「若經供養一恒沙諸佛」となっており、「河」の字が脱落しているのである。

⑫（安）「善知識尚不可逢**遇**」（五九九頁）、（抄）善知識尚不可逢**遇**」（大正八四巻一五八中）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「善知識尚不可逢**過**」となっており、「遇」の字が「過」となっている。

⑬（安）「以一金錢**貿**得千金錢」（五九九頁）、（抄）「以一金錢**貨**得千金錢」（大正八四巻一五八中）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「以一金錢**質**得千金錢」となっていて、「貨」が「質」となっている。

以上、『安養抄』に引用された『安楽集』を見てきたが、②③④⑥のように高野山宝寿院所蔵天永三年本を支持しているが、⑦⑧⑨⑪⑫⑬は支持していないのである。ただ用例十三の中で、②④⑦⑧⑨⑪⑫⑬の八つは、大谷大学所蔵順芸本を支持し、⑤⑦⑧⑨⑩⑪⑫の七つは、高野山宝寿院所蔵鎌倉時代刊本を支持している。

法然（西暦一一三三～一二一二年）『選択本願念仏集』（西暦一一九八年）。

①（安）「不出**火**宅」（六一二頁）、（選）「不出**火**宅」（一二五三頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「不出宅」とあり、「火」という文字はない。

②（安）「一由**去**大聖逢遠」（六一二頁）、（選）「一由**去**大聖逢遠」（一二五三頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「一由**玄**大聖逢遠」となっている。すなわち、「去」の文字が「玄」となっている。

③（安）「當今末法**現是**五濁惡世」（六一二頁）、（選）「當今末法**是**五濁惡世」（一二五三頁）。ここでは『安楽集』テキストの中では異読はない。しかし、『選択本願念仏集』テキスト間で異読の確認ができた。すなわち、『七祖聖教』所収本では、「當今末法**現是**五濁惡世」となっているのである。

以上、『選択本願念仏集』に見られる『安楽集』の文を紹介したが、用例は少ないので、ここでも確定的なことは言えないが、高野山宝寿院所蔵天永三年本ではないことは確実であり、①②から判断すると高野山宝寿院所蔵鎌倉時代刊本の系統の可能性が高いと考えられる。

親鸞（西暦一一七三～一二六二年）『教行信証』。

①（安）「明教興所由」（五七四頁）、（教）「**有**明教興所由」（二一二頁）。ここで（教）を支持しているのは、大谷大学所蔵順芸本である。

②（安）「**常**當觀察時方便」（五七四頁）、（教）「**常**當觀察時方便」（二一二頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本では「當觀察時方便」となっていて、「常」の字がない。

③（安）「若折乾薪以采**火火**不可得」（五七四頁）、（教）「若折乾薪以采**水水**不可得」（二一二頁）。ここで（教）を支持しているのは、龍谷大学所蔵正平二年本と『七祖聖教』所収本の二本である。

④（安）「學多聞**讀**誦」（五七四頁）、（教）「學多聞**讀**誦」（二一二頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「學多聞**讃**誦」となっている。「讀」の字が「讃」である。

⑤（安）「應稱佛名號**時**」（五七五頁）、（教）「應稱佛名號**時者**」（二一二頁）。ここで（教）を支持しているのは龍谷大学所蔵正平二年本と『七祖聖教』所収本、そして、龍谷大学元禄十一年刊本（義山版）である。

⑥（安）「後**去**者**昉**前」（五七五頁）、（教）「後**生**者**訪**前」（二五五頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「後**去**者**仿**前」、『七祖聖教』所収本では、「後**去**者**訪**前」となっている。

⑦（安）「**佛**告父王」（五七八頁）、（教）「**佛**告父王」（二九頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が、「告父王」、すなわち「佛」の字が脱落している。

⑧（安）「雖有根**牙**」（五七八頁）、（教）「雖有根**芽**」（二九頁）。（教）を支持しているのは、『七祖聖教』所収本である。

⑨（安）「若有**噉**其花菓」（五七八頁）、（教）「若有**噉**其花菓」（二九頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本「若有**敢**其花菓」となっている。

⑩（安）「即**能**改變一切諸惡」（五七八頁）、（教）「即**能**改變一切諸惡」（二九頁）。ここでも高野山宝寿院所蔵天永三年本が我々に異読を提供している。すなわち、「能」の文字がなく、「即改變一切諸惡」である。

⑪（安）「計一**切**衆生念佛之功」（五七九頁）、（教）「計一衆生念佛之功（）二九頁）。（教）を支持しているのは高野山宝寿院所蔵天永三年本と大谷大学所蔵順芸本である。

⑫（安）「若**持**師子乳一滴」（五七九頁）、（教）「若**將**師子乳一滴」（三〇頁）。ここで（教）を支持しているのは大谷大学所蔵順芸本である。

⑬（安）「隨**所詣**處無能遮障**也**」（五七九頁）、（教）「隨**諸處**處無能遮障**也**」（三〇頁）。ここでは大谷大学所蔵順芸本が「隨**所詣**處無能遮障」となっていて、「也」の字がない。

⑭（安）「要須發菩提心爲**源**」（五八七頁）、（教）「要須發菩提心爲**源**」（一〇七六頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本の二本は「要須發菩提心爲**原**」となっており、「源」の字が「原」となっているのである。

⑮（安）「此心**究竟等若虚空此心**長遠盡未来際」（五八七頁）、（教）「此心長遠盡未来際」（一〇七六頁）、（往）「此心長遠盡未来際」（一〇七六頁）。

ここでは、『安楽集』テキスト、『教行信証』テキストそれぞれに全く異読は見られない。ただ注目すべきは、（教）を支持しているテキストというのは実は源信『往生要集』に引用された『安楽集』本文なのである。すなわち、『教行信証』テキスト間で異読が見られず、『往生要集』に見られる『安楽集』本文と一致しているのである。ということは、親鸞が見た『安楽集』テキストと源信が見たそれとは同じテキスト、あるいは同じ系統を汲むテキストであったのではないか、もしくは親鸞がこの文を著す際に、『安楽集』ではなく、『往生要集』を参照したとも考えられるのである。

⑯（安）「傾無始生死有**淪**」（五八七頁）、（教）「傾無始生死有**淪**」（一〇七六頁）。「傾無始生死有**輪**」（一〇一頁）。この文は『教行信証』の中で二回確認できるが、なぜか異読が生じている。すなわち「淪」と「輪」である。『安楽集』テキストの中で高野山宝寿院所蔵天永三年本が「輪」、すなわち「傾無始生死有**輪**」となっている。

⑰（安）「當今末法**現**是五濁惡世」（六一二頁）、（教）「當今末法是五濁惡世」（一九四頁）。「當今末法是五濁惡世」（二一三頁）。ここでは『安楽集』テキスト間の異同はない。

⑱（安）「**有浮**草木」（六一四頁）、（教）「有草木」（三一頁）。龍谷大学所蔵正平二年本が「**浮**草木」となっている。

⑲（安）「悉不得**勉**生老病死」（六一四頁）、（教）「悉不得**勉**生老病死」（三一頁）。『七祖聖教』所収本、大谷大学所蔵順芸本、龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山版）が「悉不得**免**生老病死」となっている。

⑳（安）「何不捨難依易行道**矣**」（六一五頁）、（教）「何不捨難依易行道**矣**」（三一頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「矣」の文字が脱落している。

㉑（安）「**若**臥諸佛世尊常見此人如現目前」（六一九頁）、（教）「**若**臥諸佛世尊常見此人如現目前」（一〇〇頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「若」の文字が脱落している。

㉒（安）「恆與此人而**住**受施」（六一九頁）、（教）「恆與此人而**作**受施」（一〇〇頁）。ここで（教）を支持しているのは高野山宝寿院所蔵天永三年本、大谷大学所蔵順芸本である。

㉓（安）「若聞阿彌**陀徳號**」（六二六頁）、（教）「若聞阿彌**陀徳號**」（三〇頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「若聞阿彌**陀號徳**」となっている。

㉔（安）「衆生**減**盡諸經悉滅」（六三三頁）、（教）「衆生**減**盡諸經悉滅（二一二頁）。高野山宝寿院所蔵天永三年本と大谷大学所蔵順芸本では「衆生**感**盡諸經悉滅」となっているのである。

以上のように二十四の用例を見てきたが、高野山宝寿院所蔵天永三年本以外を支持しているものが多いように見える。また、親鸞は源信と同じ『安楽集』テキストを見た可能性もあるが、②④⑦⑨⑩⑭⑯⑲⑳は、高野山宝寿院所蔵鎌倉時代刊本（上巻のみ現存）を、㉑㉓㉔は龍谷大学所蔵寛元三年本（下巻のみ現存）をそれぞれ支持しているが、②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉓㉔の十九の用例は、龍谷大学所蔵正平二年本と『七祖聖教』所収本を支持していることから、『教行信証』を著す際に参照した『安楽集』テキストは、それらのいずれかの系統の可能性が高いと言えよう。

託何（西暦一二八五～一三五四年）『器朴論』（器）とする）。

①（安）「以一金銭**貿**得千金銭非一日**即**得者」（五九九頁）、（器）「以一金銭得千金銭非一日**得多日**得者」（大正八四巻一七下）。高野山宝寿院所蔵天永三年本では「以一金銭**質**得千金銭非一日**即**得者」となっている。

②（安）「若能一發此心傾無始生死有**淪**」（五八七頁）、（器）「若能一發此心傾無始生死有**淪**」（大正八四巻二一中）。高野山宝寿院所蔵天永三年本が「若能一發此心傾無始生死有**論**」となっている。

③（安）「附水**靈**河世**旱**無竭」（五八七頁）、（器）「附水**靈**河世**旱**無竭」（大正八四巻二一中）。ここでも、高野山宝寿院所蔵天永三年本が異なった読みを我々に提供している。すなわち、「附水**露**河世**早**無竭」である。

④（安）「化身菩提者謂従報起用能**趣**萬機名為化身」（五八七頁）、（器）「化身菩提者謂従報起用能**趣**萬機名為化身」（大正八四巻二一中）。高野山宝寿院所蔵天永三年本と大谷大学所蔵順芸本が「化身菩提者謂従報起用能**赴**萬機名為化身」となっている。

⑤（安）「**又彼経**云譬如有人持翳身薬」（五七九頁）、（器）「**又彼経**云譬如有人持翳身薬」（大正八四巻二七上）。ここでも高野山宝寿院所蔵天永三年本と大谷大学所蔵順芸本に異読が見られる。すなわち、前者は「**彼経又**云譬如有人持翳身薬」、後者は「**又**云譬如有人持翳身薬」である。

⑥（安）「衆生**滅**盡諸経悉滅」（六三三頁）、（器）「衆生**滅**盡諸経悉滅」（大正八四巻二七中）。高野山宝寿院所蔵天永三年本と大谷大学所蔵順芸本は「衆生**感**盡諸経悉滅」となっており、ここで（器）を支持しているのは『七祖聖教』所収本である。

⑦（安）「以珠威**力**水即**澄清**」（六〇五頁）、（器）「以珠威**力**水即**澄**」（大正八四巻二八上）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「力」の文字がなく「以珠威水即**證清**」となっている。

以上をまとめると、託何が、『器朴論』を著す際に座右においた『安楽集』テキストは、②③④⑤⑧から判断して高野山宝寿院所蔵鎌倉時代本、あるいは龍谷大学所蔵正平二年本、『七祖聖教』所収本のいずれかの系統であったと考えられる。

良忠（西暦一一九九～一二八七年）『安楽集私記』は、『安楽集』に対する註釈書である。

①（安）「**於熙連**半恆河沙等諸佛所發菩提心」（五七六～五七七頁）、（私）「**於熙連**半恆等者或本無半字又無恆字可云熙連河沙」（『浄全』一巻七一七上）。良忠は「或本」では、「半」「恆」の字がないとしているが、高野山宝寿院所蔵天永三年本や大谷大学所蔵順芸本では「熙連」の字はない。別のテキストをみていたのだろうか。いずれにせよ、「或本」ということは、良忠は少なくとも二本以上の『安楽集』テキストをみていた証左ということになろう。

②（安）「計一**切**衆生念佛之功」（五七九頁）、（私）「計一衆生念佛之功」（『浄全』一巻七一八上）。（私）を支持しているのは、高野山宝寿院所蔵天永三年本と大谷大学所蔵順芸本である。

③（安）「唯覩**報**化佛」（五八三頁）、（私）「唯覩**報**化佛」（『浄全』一巻七二三上）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「唯覩化佛」となっている。つまり、「報」の文字が脱落している。

④（安）「問曰**今世間**有人」（五九一頁）、（私）「問曰**今世間**有人（『浄全』一巻七二七下）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「問曰**世今間**有人」となっている。

⑤（安）「不覺往福**侵**已盡」（六一〇頁）、（私）「不覺往福**侵**已盡」（『浄全』一巻七三四下）。高野山宝寿院所蔵天永三年本では「不覺往福**浸**已盡」となっている。「侵」と「浸」の異読であるが、旁、読みは同じであるが、部首が異なる。

⑥（安）「衆善之**源**」（六一〇頁）、（私）「衆善**源**」（『浄全』一巻七三五上）。高野山宝寿院所蔵天永三年本と大谷大学所蔵順芸本は「衆善之**原**」。これも旁と読みは同じでるが、部首は異なる。

⑦（安）「恆與此人而**住**受施」（六一九頁）、（私）「恆與此人而**住**受施」（『浄全』一巻七三七上）。高野山宝寿院所蔵天永三年本と大谷大学所蔵順芸本は「恆與此人而**作**受施」となっている。

⑧（安）「有覩不**覩**」（六一九頁）、（私）「有覩不**覩**」（『浄全』一巻七三七下）。高野山宝寿院所蔵天永三年本は「有覩不**現**」となっている。

⑨（安）「**常**念我名」（六一九頁）、（私）「**當**念我名」（『浄全』一巻七三八上）。

⑩（安）「法身智身大**慈**悲身」（六二〇頁）、（私）「法身智身大悲身」（『浄全』一巻七三八上）。

⑪（安）「皆説入地加行**道**地滿功徳利」（六二四頁）、（私）「加行地滿」（『浄全』一巻七三九上）。

⑨⑩⑪については『安楽集』テキスト間の異読は確認できなかった。果たして良忠はどの『安楽集』テキストを見ていたのだろうかという疑問も生じてくる。

⑫（安）「通行**通**伴故」（六二四頁）、（私）「通行**通**伴故」（『浄全』一巻七三九上）。高野山宝寿院所蔵天永三年本のみ「通行**道**伴故」となっている。

以上、見てきたように良忠が見ていた『安楽集』テキストは二本以上であることは明らかであるが、どのテキストを見ていたのかを判断できる用例がなかったことから、残念ながら明らかにすることはできない。(11)

五、結論

以上、検討した結果をまとめると次のようになる。

・中国における『安楽集』は、唐代までは存在していたと考えられていたが、宋代の最初期に、その存在が確認される。

・『無量寿観経纘述』に引用される『安楽集』、『敦煌宝蔵』に収められている『安楽集』断片は、高野山宝寿院所蔵天永三年本、もしくは大谷大学所蔵順芸本の特徴が見られる。ということは、高野山宝寿院所蔵天永三年本は、他の現存するテキストとは異同が多く見られ、異系統のテキストではあるが、大谷大学所蔵順芸本も含めて、『安楽集』テキストの古い形態を我々に伝えている可能性が他のテキストに比べて高いと考えられる。

・源隆国が参照した『安楽集』テキストは、大谷大学所蔵順芸本の系統であろう。

・永観が見た『安楽集』テキストは、『七祖聖教』所収本、あるいは龍谷大学所蔵元禄十一年本（義山版）の系統であろう。

・法然の場合、確定的に言えるのは、高野山宝寿院所蔵天永三年本以外のテキストである。

・親鸞が『教行信証』をまとめる際に参照したのは、龍谷大学所蔵正平二年本、あるいは『七祖聖教』所収本のいずれかの系統を汲む『安楽集』テキストであろう。

・詫何が見た『安楽集』テキストは、高野山宝寿院所蔵鎌倉時刊本、『七祖聖教』所収本の系統であろう。

【参考文献】

・赤尾栄慶〔二〇一四〕「高山寺旧蔵『安楽集』の古写本―書誌情報について―」国際シンポジウム報告書『東アジア仏教写本研究』国際仏教学大学院大学日本古写経研究所文科省戦略プロジェクト実行委員会。
・内藤知康〔一九九九〕『安楽集講読』永田文昌堂。
・落合俊典〔二〇一〇〕「野村美術館蔵『安楽集』二巻の書写年代」『浄土宗学研究』第三六号。
・国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会〔二〇〇八〕日本古写経善本刊　第三輯『観無量寿経・無量寿経優婆提舎願生偈註巻下』国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会。
・西域文化研究会〔一九五八〕『西域文化研究―敦煌仏教資料』第一、法蔵館。
・齊藤隆信・曽和義弘・加藤弘孝・永田真隆・小川法道〔二〇一八〕「『安楽集』訳註㈠第一大門」『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第四号。
・齊藤隆信・曽和義弘・加藤弘孝・永田真隆・小川法道〔二〇一九〕「『安楽集』訳註㈡第二大門」『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第五号。
・齊藤隆信・曽和義弘・加藤弘孝・永田真隆・小川法道〔二〇二〇〕「『安楽集』訳註㈢第三大門」『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第六号。
・齊藤隆信・曽和義弘・加藤弘孝・永田真隆・小川法道〔二〇二一〕「『安楽集』訳註㈣第四大門・第五大門・第六大門」『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第七号。
・杉山裕俊〔二〇一四〕『安楽集の研究』大正大学平成二六年度学位請求論文。
・中国仏教研究会〔一九九九〕「『安楽集』「第一大門」の訳注研究」『東京大学仏教青年会』。

・塚本善隆〔一九七六〕『塚本善隆著作集　第四巻　中国浄土教史研究』大東出版社。
・辻本俊郎〔二〇二〇①〕「曇鸞『論註』テキスト考」『仏教学会紀要』第二五号。
・辻本俊郎〔二〇二〇②〕「曇鸞『無量寿経論註』、道綽『安楽集』の流伝―諸師の引用文より見て―」『東アジア研究』第七二号、大阪経済法科大学アジア研究所。
・禿氏祐祥〔一九三九〕「安楽集の書誌学的研究」『宗学院論輯』第三一号。
・佛教大学総合研究所〔二〇一一〕『浄土教典籍目録』佛教大学。
・牧田諦亮・直海玄哲・宮井里佳〔一九九五〕「道綽・その歴史像と浄土思想」『浄土仏教の思想』第四巻、講談社。
・宮崎円遵〔一九三九〕「『安楽集』の古本二種―口絵解説―」『宗学院論輯』第三一号。
・山本仏骨〔一九五九〕『道綽教学の研究』永田文昌堂。

註

（1）浄土真宗本願寺派総合研究所教学伝道研究室編『浄土真宗聖典全書（一）三経七祖篇』本願寺出版では、『安楽集』は、高野山宝寿院所蔵鎌倉時代刊本（上巻）、龍谷大学所蔵寛元三年刊本（下巻）を底本とし、高野山宝寿院所蔵天永三年書写本、龍谷大学所蔵正平二年書写本、本派本願寺『七祖聖教』所収本が対校本として使用されている。また、大正新脩大蔵経では、龍谷大学所蔵寛政八年刊本を底本とし、寛元三年本、高山寺写本、崎陽本、元禄十一年（義山）本、鎌倉時代刊本、明暦元年刊本、高野山宝寿院天永三年書写本が対校本として使用されている。浄土真宗聖典編纂委員会〔一九九二〕『浄土真宗聖典七祖篇』本願寺出版社では、巻上の底本として高野山宝寿院所蔵鎌倉時代刊本、下巻の底本として龍谷大学所蔵鎌倉時代刊本を使用し、その対校本として高野山宝寿院所蔵天永三年書写本、

龍谷大学所蔵正平二年書写本、崎陽本、本派本願寺『七祖聖教』所収本が使用さえている。真宗聖教全書編纂所〔一九四一〕『真宗聖教全書一、三経七祖部』大八木興文堂では、底本が本派本願寺蔵本を底本として、高野山宝寿院所蔵天永三年書写本、崎陽本、龍谷大学所蔵鎌倉時代刊本（下巻のみ）、龍谷大学所蔵正平二年書写本、及び大派・依用十行本が対校本として使われている。

（2）また、『安楽集』テキストの中で高野山宝寿院所蔵天永三年本には、「故生方便法身。由方便法身**故顯出**法性法身」の文言が見当たらない。ということは、延寿は、『宗鏡録』を著す際に見た『安楽集』テキストは、高野山宝寿院所蔵天永三年本の系統以外のものであろう。

（3）『大乗同性経』（闍那耶舎訳）「龍主王如来」（大正・一六巻六五一中）。

（4）『大乗同性経』（闍那耶舎訳）「踊歩揵如来」（大正・一六巻六五一中）。

（5）『大乗同性経』（闍那耶舎訳）「穢濁世中現成佛者」（大正・一六巻六五一中）となっており、『無量寿観経纘述』と同文である。

（6）『大乗同性経』（闍那耶舎訳）は、『無量寿観経纘述』ではなく、『安楽集』と同様、「末法」となっている。

（7）『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』（失訳）「父名月上転輪聖王、其母名曰殊勝妙顔」（大正一二巻・三五二中）参照。

（8）『無量寿観経纘述』は、『安楽集』との関係で様々な議論がなされている。『安楽集』は、天親菩薩論云、天親浄土論云とあるが、実際には曇鸞『論註』を引用していることはよく知られている。『無量寿観経纘述』にも天親菩薩論、すなわち、『無量寿経論』が引用されている（『無量寿観経纘述』乙本一五七～一六四行目）。それらを見てみると、『無量寿観経纘述』「若善男子善女人修五念門成就**者**」。正倉院聖語蔵写本、高麗大蔵経もこれを支持している。一方、曇鸞『論註』所引本では「若善男子善女人修五念門**行**成就」となっている。また、『無量寿観経纘述』「二者観察阿弥

陀仏**功徳荘厳**」。正倉院聖語蔵写本、高麗大蔵経もこれを支持している。曇鸞『論註』所引本では「二者観察阿弥陀仏**荘厳功徳**」となっている。つまり、道綽は、『論註』を参照し、『無量寿観経纘述』の著者は『無量寿経論』を参照していたということになる。

(9) 敦煌写本は、おそらく数行前に「三者化身菩提」とあるのを誤写した可能性が高いのではないかと考えられる。

(10) 『坐禅三昧経』(鳩摩羅什訳)「若折乾木以求火、火不可得無智故」(大正一五・二八五下)

(11) (安)の底本から考えてみると、①③④⑤⑥は高野山宝寿院所蔵鎌倉時代刊本を、⑦⑧⑨⑩⑪は龍谷大学所蔵寛元三年刊本を支持しているのである。前者は上巻のみ、後者は下巻のみの現存であるが、良忠の活躍した時代と考え合わせると、これらのテキストは出版当時から完本として流布していたのかどうかは疑わしい。